

近江・土山町大河原の盆行事

柿 本 雅 美

はじめに

盆行事は年中行事の一つとして、現在も正月と並んで根強く残る伝統行事である。地域によってその内容は異なるものの、都市部においても盆行事は行なわれており、盆休みを利用した旅行や帰省に伴う渋滞・ラッシュは、風物誌と言うべきものになっている。これまで、柳田國男の『先祖の話』をはじめ、様々な盆行事の研究が行なわれてきた。民俗誌や市町村史においても必ずと言っていいほど、盆行事の事例が報告されており、日本にとって代表すべき民俗行事の一つと言える。そこで本稿は、滋賀県甲賀市土山町大河原おい

て実施されている盆行事を紹介し、祖先信仰研究のための事例を提供することにした。

筆者は、平成十七（二〇〇五）年から現在に至るまで、継続して同地域の調査を実施してきた。その大河原は、滋賀県の南端にある甲賀市土山町に属しており、三重県との県境にある山間の村である（図一）。大河原の大部分は山に覆われ、南部には野洲川へと続く松尾川が流れている。集落の一部は、三重県と滋賀県の県境を南北に走る鈴鹿山脈を中心とした鈴鹿国定公園に含まれており、夏には多くの観光客が訪れる。

大河原は、古代は頓宮牧、中世には青土荘に属しており、承久年間（一二一九—一二二二年）に小椋大蔵

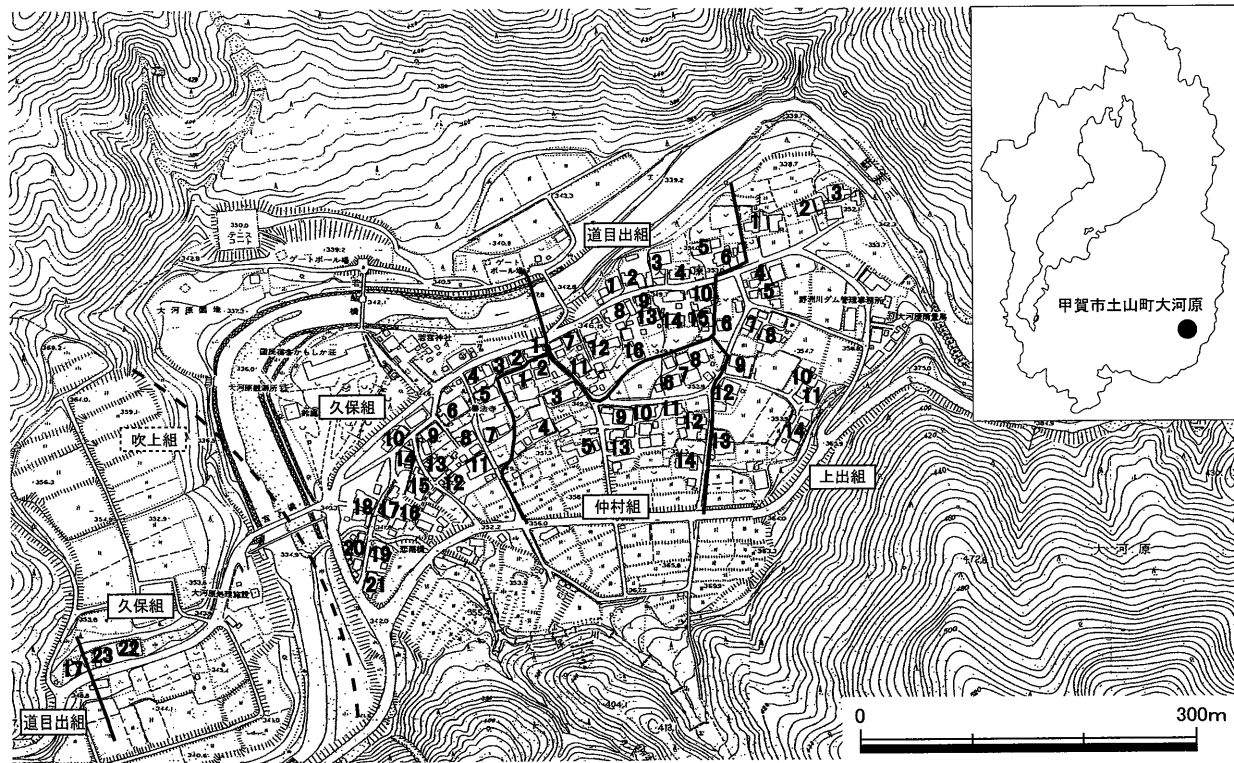


図1 大河原の村組（土山町都市計画図1992より引用、改変）

卿の一族が大河原に定住し、木地挽業を始めたとき、文明の頃（一四六九—一四八七年）には一〇余町の開田があったとされている。^③近世に入り、隣接する鮎河村から大河原村、そして三重県孤野町湯の山を結ぶ「鮎河越え」という峠道ができたことによって、大河原は交通の要所となった。^④近世において、小堀遠江守や山口但馬守など様々な大名領とされ、時には、幕府の直轄領となった。明治二十二（一八八九）年、大河原は甲賀郡鮎河村大字大河原となり、昭和三十（一九五五）年に甲賀郡土山町と合併、平成十七（二〇〇五）年に甲賀市となった。

昭和四十五（一九七〇）年以降の土山町（甲賀市）の行政区分別人口を見ると、昭和四十五年には三七五人であったのが、しだいに人口は減少し、平成二十（二〇〇八）年三月では六七世帯二〇一人となっている。昭和四十五年からの三八年間で四七％も減少しており、過疎化が進んでいる。加えて現在では、高齢化と少子化も進んでおり、一人暮らしの高齢者は多い。人口は、昭和四十五年から急激な減少ではなく、緩や

かな減少を示し、その要因として、若者が進学や就職、結婚などで村を離れたことが、高齢化と過疎化に繋がったと推測できる。

また、集落内には若宮神社と浄土宗の善法院があり、村人のほとんどがこの寺社の氏子、檀家である。主な生業は炭焼きと材木業であったが、昭和五十五（一九八〇）年代には衰退し現在では行なわれていない。

一 サンマイ掃除と墓参り

大河原の盆は、八月七日に行なわれるサンマイ掃除からはじまる。ここでは両墓制がとられており、集落南側の山斜面に「サンマイ」と呼ばれる埋め墓、善法院の中に「ハカ」と呼ばれる参り墓がある。サンマイが高いところにあるのは、先祖が村を見下ろして村を守ってくれるためという。火葬となった現在でも、ハカではなくサンマイへと納骨する人は多い。寺院には先祖代々の墓石を建立し、一族で一基の墓を持つのに対してサンマイは個人の墓が作られる。サンマイへ納

骨するときに埋める場所は、家ごとに分けられているものの明確に区分されているわけではない。土葬であれば埋葬するときにそれ相應の作法を行なっていたが、遺骨だけを埋葬することになった現在では近い親族が遺骨を埋め、あらかじめオツサン（善法院住職）に書いてもらった卒塔婆を立てる程度である。

サンマイへ参るのは年に三度、八月七日のサンマイ掃除と春秋のお彼岸のときのみで、普段行くことのない忌まわしい場所である。現在は猿や鹿によつてサンマイが荒らされるのを防止するために、周囲は電柵で覆われている。それ以前は木が生い茂り、薄暗くおどろおどろしい場所であつたが、電柵設置にもなつてサンマイ整備がなされたために、以前のようなうっそうとした薄気味の悪い雰囲気はない。

さて、サンマイへ参るときには現在でも一定の作法のようなものがある。サンマイへ行くとまず、入り口付近にある六地藏とムエンサン（無縁さん）の一体一体すべてにお供えをし、線香とろうそくを立てて拝む。そして墓参りをする前に、卒塔婆付近の草むしり、茶

碗や花立てを洗うといった掃除を行なう。続いて線香に火を点け、供物を供えて卒塔婆に水をかけたあと、鉦を鳴らしながら拝む。このときに、ついで参りをしてはいけないという。ついで参りとはその名が示す通り、「この人もついでに拜んでおこう」といったようににして、他人の墓にも参ることを指し、このことを村の人々は現在も厳格に守っている。人々は、掃除とお参りが済むと持つて来たものを全てを捨てて帰る。持ち帰るものは数珠と鉦くらいで、供物を入れてきたカゴなど、サンマイに持つて行つたものは何一つ持ち帰つてはならないという。大河原出身のある女性は、他地域に嫁ぎ、墓参りに行つた際、余つた供物を「持つて帰る」と言われ、非常に驚いたそうだ。

また、サンマイから出るときには靴底を洗い、家に入る前には身体に塩を振らなければならない。これは葬式と同じように死の穢れを祓うためと考えられ、このことからサンマイは忌まわしい場所であることがわかる。しかし、ハカに行つた際にはこのような行為は行なわれない。

墓参りは、十三日の午前中に行なわれる。この日にあわせて多くの人々が帰省するため、普段は静かな家でも賑やかな声が聞こえるようになる。ここで言う墓参りは善法院の境内にあるハカへ参ることである。墓石には「〇〇家之墓」「先祖代々之墓」と記され、個人の墓は一基もない。村内婚をした場合には、婚家の墓参りを行うが実家の墓には参らない。家を継ぐ人がいない場合には、嫁に行った娘が墓参りを行なうケースもある。

十三日の早朝に、大河原在住の親戚や本家の家に親類が集まり、皆で寺へと向かう。寺に行くとき、寺の縁側に置かれた櫓に水をつけて卒塔婆の表面をこすり、賽銭を入れて拜む。これは、餓鬼供養であるという。そして墓へと向かい、墓石に水をかけ洗う。オシヨライサン、ホトケサンと同じお供え物をし、ろうそく、線香に火を付けてサンマイ掃除のときと同じように鉦を鳴らしながら拜む。こうして墓参りは終了し、親類宅や本家にて昼食を共にしながら、世間話に花を咲かす。

二 先祖を祀る

大河原では、盆棚に祀る霊のことをオシヨライサンといい、盆棚をオシヨライ棚という。オシヨライ棚は八月十三日の夕方に軒下へ南に向けて設置する（表1、2）。これは家の玄関が南を向いているためであると考えられる。ほぼ全戸の家がオシヨライ棚を建てオシヨライサンを祀っており、祀らない家は寺院と盆期間中に不幸ごとのあった家などが挙げられる。その形状は柱に板を取り付けたもので、無縁・餓鬼を祀る場合によくみられ、三重県・志摩地方に多いとされる⁵⁾。また、仏壇へ祀る霊はホトケサンと呼ばれ、ホトケサンは一年中仏壇において祀られる。

さて、翌十四日の朝からお供え物をオシヨライ棚と仏壇に供え、オシヨライサン、ホトケサンを祀る。精霊迎えは特に行なわれないが、昭和初期頃までは各家で迎え火と送り火を焚いていたという。現在、オシヨライサンはオシヨライ棚へ勝手に帰ってくる⁶⁾と考えられている。寺では、十四日から十五日まで帰ってきた

表1 大河原の盆行事




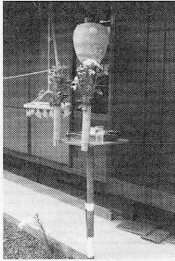

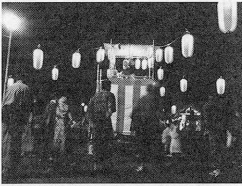
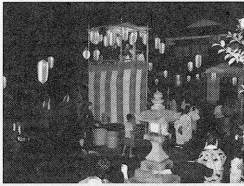


8月7日	午前中	サンマイの掃除  
8月13日	9:00頃	寺の墓に参る。(棚と同じお供え)
	17:00頃	オショライサンの棚を設置する。 棚とともに提灯をつるす家も多い。
8月14日	7:00頃	お供え物を供える。 オチツキモチというぼた餅を供える。 Y・Y氏宅の場合(里芋の葉の上に桃、ぶどう、まくわ瓜、バナナ、梨、トウモロコシ、トマト、胡瓜、茄子、唐辛子、さんど豆、鬼灯、砂糖菓子、お菓子、手で折った麻の箸、線香、ろうそく、水 オショライ棚の線香は、胡瓜を輪切りにしたものにする。    ↑ 固定型 ← 一本足型
	8:00頃 ～	棚経…オッサン(和尚さん)が村内の家を一軒一軒回ってお経をあげる。 (村内全部を一人で回するため何時ごろ来るか解らない。しかし、久保組は大体午前中。)
	7:00、 12:00、 18:00頃	オショライサン・ホトケサンのご飯は、一日三度人間が食べるご飯と同じものを供える。
8月15日	午後	施餓鬼…新盆の家はお寺でお経を上げてもらう。親戚は行く。
	7:00、 12:00、 18:00頃	オショライサン・ホトケサンのご飯は、一日三度人間が食べるご飯と同じものを供える。
	18:00頃	盆踊り  
8月16日	5:00頃	オショライサンのお供えを持って川へ行き、お祈りをする。この時、お菓子、ろうそく、線香、鐘、花、お供えを持っていくが、流してはいけない。  

表2 盆棚の形態と設置場所

村組	番号	棚の形態	棚の設置場所	方位	盆提灯	居住
上出組	1	一本足	軒下	南	○	○
	2	一本足	軒下	南	○	○
	3	一本足	軒下	南	×	○
	4	?	?	?	?	○
	5	固定	軒下	南	×	○
	6	一本足	軒下	南	×	○
	7	一本足	軒下	南	○	○
	8	一本足	軒下	南	○	○
	9	一本足	軒下	南	○	○
	10	一本足	軒下	南	○	○
	11	なし	なし	なし	×	○
	12	一本足	軒下	南	○	○
	13	一本足	軒下	南	○	○
	14	一本足	軒下	北	○	○
道目出組	1	一本足	軒下	南	×	○
	2	?	?	?	?	○
	3	一本足	軒下	南	○	○
	4	一本足	軒下	南	○	○
	5	一本足	軒下	南	○	○
	6	固定	軒下	南	○	○
	7	一本足	軒下	南	○	○
	8	吊るす	軒下	南	○	○
	9					×
	10	一本足	軒下	南	○	○
	11	固定	井戸小屋	北	○	○
	12	一本足	軒下	南	○	○
	13	一本足	軒下	南	×	○
	14	一本足	庭(玄関前)	南	×	○
	15	?	?	?	?	○
	16					×
	17	一本足	軒下	南	×	○
仲村組	1	一本足	軒下	北	○	○
	2	一本足	軒下	南	×	○
	3	固定	軒下	南	○	○
	4	一本足	庭	北	×	○
	5	一本足	軒下	南	○	○
	6	一本足	軒下	南	○	○
	7	一本足	軒下	南	○	○
	8					×
	9	一本足	軒下	南	○	○
	10	一本足	軒下	南	○	○
	11	一本足	庭	北	×	○
	12					×
	13	一本足	軒下	南	○	○
	14	一本足	軒下	南	○	○

村組	番号	棚の形態	棚の設置場所	方位	盆提灯	居住
久保組	1					×
	2	一本足	軒下	南	○	○
	3	固定	軒下	南	○	○
	4					×
	5	固定	小屋	北	×	○
	6	一本足	玄関	南	×	○
	7					
	8	一本足	軒下	南	×	○
	9	一本足	軒下	南	×	○
	10	一本足	軒下	北	×	○
	11	一本足	小屋	北	×	○
	12					×
	13	一本足	軒下	南	×	○
	14	一本足	軒下	北	×	○
	15	一本足	軒下	南	×	○
	16	?	?	?	×	○
	17	一本足	軒下	南	○	○
	18	一本足	玄関	西	×	○
	19	一本足	軒下	西	○	○
	20	なし	なし	なし	×	○
	21	一本足	庭(玄関前)	北	×	○
	22	一本足	庭	南	×	○
	23					×

K-20は、調査を実施した8月14日が葬式だったため祀っていないと考えられる。なお、番号は、図1の番号と対応している。

※棚の形態については、表1の8月14日の項を参照してもらいたい。

先祖が迷わないように高灯籠で迎え火を焚く。

次にオシヨライサン、ホトケサンの祀り方を見ていく。まず、オシヨライ棚と仏壇の前にサトイモの葉の上に乘せたお供えをする。本来は蓮の葉を使用するのだが、蓮の葉が手に入らないためサトイモの葉で代用しているそうだ。お供え物は野菜や果物、砂糖菓子、お菓子、オチツキモチ、手で折った麻の箸、線香、ろうそく、水などがあり、線香台には胡瓜を輪切りにしたものを使用する。オチツキモチとは、ぼた餅のことである。近年ではスーパーなどに果物、野菜、菓子などを入れた盆用のお供え物セットが販売されているため、このセットやこれに加えて畑で収穫した野菜などをお供えする家もある。

そして十四・十五日は、オシヨライ棚、仏壇ともに人が食べる食事と同じものを毎食ごとに供え、オシヨライサンに限っては柿の葉を皿にして食事をお供え。食事や供えるものに特に決まりはないが、素麺はどこの家でも供えているようである。さらにオシヨライ棚には盆期間中の夜に村内のほとんどの家でオシヨライ

チョウチンという提灯をつり、灯りをつける。また、昭和三十（一九五五）年代前半ごろまでは、割り箸を折って四つ足をつけた茄子や胡瓜を棚に供えていたそう。以上のようにして帰ってきた先祖をオシヨライ棚と仏壇に祀る。

盆踊りの済んだ十六日の早朝、オシヨライサン送りがなされる。まだ日が昇りきらず薄暗い早朝五時頃、松尾川の河原に、花とお菓子、オシヨライサンのお供えを河原の石の上に並べて、ろうそく、線香に火を点し、鉦を鳴らしながら拜んでオシヨライサンを送る。

昭和五（一九三〇）年生まれの女性は子供のころに川で遊んでいると、上流からお供えの果物が流れてきたので、よく拾って食べていたと笑いながら教えてくれた。以前はこのようなお供えや花を川に流していたそうだが、現在では持ち帰って捨てるようになっていく。これは、環境問題などの理由からお供えを川に流してはいけないという役場からの通達があったため、これ以降、川に流す行為は行なわれなくなった。合併以前は、お供えを捨てるためのゴミ袋が支給されていたと

いう。しかし、お供えを川に流さなくなった現在でもオシヨライサンを送るために、一度お供えを川へ持つていき、念仏を唱える。主に、家の年配者が早朝にひっそり行なうため、オシヨライサン送りを行なっていることを知らない人にとっては、オシヨライサンのお供えはゴミ袋に入れて捨てるという行為が当たり前になるだろう。

三 盆踊り

盆踊りは、十五日の一八時頃より若宮神社の境内にて催される。午後から青年団をはじめ、区長や組長などが社殿の前に櫓を組み、出店などの準備を行なう。

現在、青年団の唯一の仕事が盆踊りの準備と手伝いであり、村外に出ている青年団員は盆踊りのために帰省しなくてはならない。以前は、八月十五日だけではなく、二十三日の地藏盆の際にも盆踊りは行なわれていたという。このことは、青年団の団長が管理している資料の一つである『青年団記録簿』に記載されている。

昭和四（一九二九）年八月二十三日の項目に「當日は時節喜び夜は踊り若宮神社内にて有り」とあり、翌二十四日には「夜善法院に於て踊り有り」とある。当時は地藏盆にも二日間盆踊りが行なわれていたことが窺える。

昭和三十三年（一九五八）年八月十五日の項目には「本日は例年の通りお寺に於て盆踊りを行なう」、十六日には「本日は昨夜に続いて若宮神社境内で菱装盆踊りを行う」とあり、戦後も盆踊りが二日に渡って若宮神社、善法院の境内で行われていたことがわかる。

盆踊りの時期が近づくとも村の小学生が盆踊りの案内のポスターを描き、村内の数カ所へ掲示する。日暮れ時になると神社から江州音頭が鳴り始め、浴衣を着込んだ男性や女性、また子供たちが集まって来て、櫓の回りに円を描きながら踊り始める。酒やジュースが振る舞われるため、踊り疲れた人々は社務所や境内の石に腰掛けて酒やジュースを飲みながら休憩する。同じ村内にいても普段なかなか会わない人が集まるので、会話が弾むようだ。しばらく談話と酒を楽しみ「じゃ

あ踊るかな」と言いながら、再び踊りの輪の中へと戻

っていく。子供は前の大人の踊りを見よう見まねで踊ったり、ただ円の中を歩いたり様々である。大人は踊り疲れたら酒を飲み談笑するが、子供は出店でヨーヨーすくいをしたりかき氷を食べたりする。これらの出店は青年団が世話をするため、青年団員が輪に入って踊ることはあまりない。

そして午後九時ごろになると、くじ引きが始まる。盆踊りに参加した人々に数字の書かれた券を配つておき、くじ引きを行なう。賞品は、清酒や日用雑貨などで、事前に各組長によって盆踊りのための集金がなされるため、全員に必ず景品が当たるようになっている。くじ引きが終わると盆踊りは終了となり、各自帰宅するが青年団や区長などの役員は直会と称する打ち上げを行う。

このように、盆踊りは娯楽性の高い行事となつてゐるが、本来、盆踊りは先祖に踊りを見せるためのものであつた。しかし、娯楽の少なかつた昔は、数夜続けて盆踊りを行なうことが楽しみの一つであつたとある

男性は言う。

四 寺と盆行事

寺が関わる盆行事はタナギョウ（棚経）と施餓鬼の二つである。棚経はオッサンが村内の家を一軒一軒回って読経することで、十四日の朝八時頃より村の西側、善法院も属する久保組^⑥から始まる。オッサンは一人で村中の家々を回るため、すべてを回りきるころには夕方になつてしまふ。久保組は朝早くに終了するが、村の東端の上出組ではいつオッサンが来てくれるか分からないため朝からずっと家にいなくてはならない。この日はどの家でも仏間や仏壇を掃除し、木魚、鉦、オッサン用の座布団を用意しておく。そしてオッサンが来ると、仏壇に向かつて読経が行なわれ五分程度で終了する。そのあと家人と少し話をして、次の家へと向かう。一般的に棚経は、盆棚に向かつて読経することとされているが、大河原では仏壇に向かつて読経されている。

施餓鬼は、十五日に寺で行われる。これは、一年間で亡くなった人のための新盆の法要である。親類や隣近所の者は喪服で寺へ行き、読経してもらう。その年に何軒も新盆の家がある場合は、この日にどこの家も施餓鬼を行なうために一日に数度参列しなくてはならない場合も生じてくるのである。

五 ホトケサンとオシヨライサン

オシヨライサンはホトケサンがいなくても祀るとされ、また盆棚にはオシヨライサンと共に、センゾヤシキ（先祖屋敷）も祀るという。センゾヤシキとは、その名の通り家の先祖と家のある土地のことを指す。大河原の人は「屋敷あつてこそ先祖」と言い、家のある土地を先祖と同じく重要視している。ここでいう先祖とはその家で亡くなった人を指すため、古い家ほど先祖の数は多く、インキヨ（分家すること）して日が浅い家には先祖が誰もいないことになる。

昭和五（一九三〇）年に生まれた女性は大河原で育

ち、高知県出身の男性と結婚、大河原に家を建てて暮らしていた。しかし、数年前に夫が亡くなってからは一人暮らしをしている。この女性は、毎年オシヨライ棚を立ててオシヨライサンを祀ってきたが、夫である男性が亡くなってからは仏壇でホトケサンも一緒に祀るようになった。この家はシンヤと呼ばれる分家した家であるため、ホトケサンは亡くなった夫だけであるという。この家の例だけではなく、大河原のどのシンヤでもオシヨライサンは必ず祀っている。村の人々は「ホトケサンは先祖、オシヨライサンも先祖」と言い、両者を明確に区分している。ホトケサンは、古い家であればあるほどその数が多いといわれている。

おわりに

以上が大河原における盆行事の一連の流れである。同地域の盆行事はさまざまな変遷を経て、現在の形になった。サンマイ掃除は、八月七日に行なうと決まっているが、村外に出ている家族は、盆に帰省した際に

サンマイへ参る。他所へ転出してしまった家の中には、親類にサンマイ掃除を頼むこともあるため、頼まれた家は自家の掃除のときに、かつては、厳格に守られていた「ついで参り」をすることもある。

また、オシヨライサンの供物にも変化が見られる。

以前は、十三日のオシヨライ棚を設置するまでに、畑から供物の野菜などを収穫し、四つ足をつけた茄子や胡瓜などを用意していた。しかし、現在では盆用のお供え物セットを購入することによって、供物を用意する手間を省き、また、供物も簡略化された。オシヨライサンの皿である柿の葉を使用せずに日常と同じ皿を使用している場合や、胡瓜の線香台ではなく、仏壇用の線香台をそのままオシヨライ棚に移している家もある。オシヨライ棚の祀り方も大きく変化を遂げていると言えよう。

オシヨライサン送りも先に述べたように、主に年配者が早朝にひっそり行なっているため、次世代へと継承されずになくなってしまいう可能性がある。家ごとに行なわれている行事は、簡略化してしまい、あるい

は継承されずに失われるかもしれないが、盆の先祖祭祀がなくなることはない。

現在、先祖はオシヨライ棚へ勝手に帰ってくると考えられているが、昭和十（一九三五）年頃まで迎え火を焚いて先祖を迎えていたために、この概念は近年に誕生したと言える。これらのことから、大河原の盆行事は失われ、変化し、新しく誕生するなどさまざまな過程を経て、現在の形となり、またこれからも変化し続けるだろう。

本稿は、大河原の盆行事を報告するものであるため、考察を行っていない。これらの事例を近隣地域の盆行事と比較し、検討する作業は次回の課題としたい。

謝辞

最後になりましたが、区長をはじめ、調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。また、本稿執筆にあたり八木透先生、安井真奈美先生にご教示を頂きました。重ねて感謝申し上げます。

註

- (1) 柳田國男 一九六九(二九四六)『先祖の話』(『定本柳田國男集』一〇 筑摩書房)
- (2) 土山町役場 一九六一『土山町史』五八三頁。
- (3) 滋賀県甲賀郡教育会 一九二六『甲賀郡志』三四五頁。
- (4) 宇野健一 一九七四『新註 近江輿地志略 全』弘文堂、六五六頁。
- (5) 小松理子 一九七七「益棚(三)―棚の諸形態について―」『民具マンスリー』一〇―一、一一頁。
- (6) 大河原は、上出組、道目出組、仲村組、久保組の四

つの組に分かれている。大正時代までは、小字名から名付けられた吹上組というものもあった。現在、この吹上組がなくなった理由を知っている人は少ないが、大正九(一九二〇)年生まれの男性によると、風が強く住みにくかったので吹上組の人が道目出組へと引越し、そのため吹上組と道目出組が一つになったという。一方、関西大学Ⅱ部民俗研究会の報告書によると、吹上組の戸数が減ったため、久保組と統合されたとある[関西大学Ⅱ部民俗研究会 一九七九『大河原 民俗調査報告書』一〇頁]。

